

噂の町を
ドーム
アップ



甦る秘境のロマン。 平家落人伝説の里づくり。

八代郡泉村

「深山幽谷」という形容が、まさにピッタリの秘境「五家荘」。平家の落人伝説が今なお語り継がれる隠れ里。覆いかぶさるように広がる森林、山あいを縫うように流れる清流、どこまでも澄んだ空気。秘境の地ゆえに形づくられた独特の山村文化。泉村では、ここ五家荘地区の整備振興を核にした「むらおこし」平家伝説の里づくりを展開中である。「やるぞ日本一」、今回は、八代郡泉村——きわだった地域個性をもつ秘境の「むらおこし」をご紹介します。



知られざる歴史の薫り、 ふたしミステリー。 こゝは、平家落人ゆかりの里。



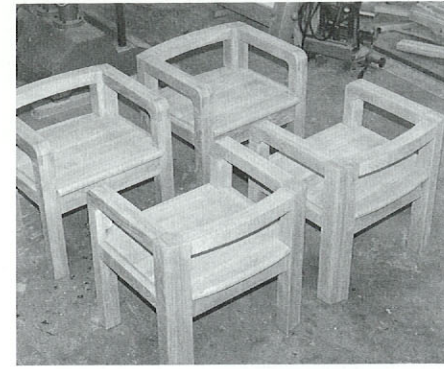
切り立った深い溪谷に渡された、樫木の吊り橋。辺りには、人の足を寄せつけない原生林が、鬱蒼としてどこまでも続いている。その昔、源氏との合戦に敗れた平家落人たちは、厳しい追手の目を逃れて、この地に隠れ住んだのであろうか。何百年の間、この隠れ里は、人のな

りわいも歴史も山また山の緑に吞まれて、外界を頑なに閉じて来た。近世までは正に伝説の秘境であった。村をぶらついてみると、何でもない家のたたずまいに、ゾクゾクするような歴史の気配を感じて、思わず立ち止まってしまう。ミステリアスな秘境のムードに浸って見たかったら、一度五家荘を訪れてみるのだ。村をあげて、「平家伝説の里づくり」が行われているので、ちょっとした歴史散策の気分も味わえる。たぶん、観光ずれしでない重厚な魅力がいくつも発見できるはずだ。溪流のせせらぎを遠くに聞きながら、まず樫木地区を訪れてみた。樫木では、隠れ里の画影の濃いことや葺き屋根の民家二棟と納屋一棟を復元。この五月からは、民家を利用しての食堂・休憩施設もオープンしている。名づけて、「民家苑」。歩き疲れて小休止をとるには、打ってつけの場所だ。山菜や川魚で胃を清めながら、涼みをとるのにも良い。

村役場の人に話を聞いてみると、今後、「平家伝説資料館」と「伝統芸能保存伝習施設（神楽舞台）」も同敷地内に建設予定。周辺は遊歩道や庭園も整備していくとのこと。ちょっとした歴史のプログラムといった感じ。完成が楽しみである。

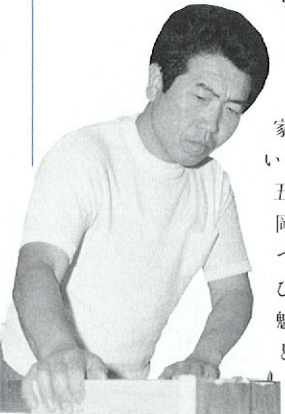


五家荘に生きる 証としての産品を。 森の幸とのなりわい。



五家荘・葉木で民宿を営む松岡一さんは、葉木木工生産組合長でもある。「五家荘工芸」と書かれた木工所で、五人の仲間たちと、工夫を凝らしての木工品の生産に取り組んでいる。

「私たちにとっては、暮らしそのものが森とのふれあい。木工所では注文生産が中心ですが、私自身としては、五家荘に生きている証となるような物をつくりたいですね。もみじを素材にした



りして。民宿でももっと、この特性を生かしていかなくては、と思っています。食を通じての平家文化とか、今研究しているところです。」五家荘の山奥に生きる松岡さんも、平家伝説の里づくりをしっかり支えるひとり。「本当に五家荘の魅力が伝わるものを」と、研究に余念がない。

800年の秘伝の味、ヒット！ どうぶのみそ漬け。

「それまで、旅館のお客様用に少し作っていたんですが、昭和50年頃から売り出しまして、今では注文に応じきれなくて。」平家落人達の常食であったと伝えられるとうぶのみそ漬。一つ一つ、ガーゼに包み、みそだるに漬け、冷蔵庫で寝かすこと約半年。手の温もりのする、ふるさとの逸品だ。今では泉村の特産品として、全国からの引き合いが絶えない。有名になった気負いもなく、役場近くの泉屋本舗では、今日も淡々とどうぶが包まれていく。



隠れ里の銘茶「泉茶」の、 ブランド名一新も。



村の代表的産物、「泉茶」。農業の基幹作物である茶の振興も、むらおこしの重要課題の一つ。茶業青年部長の寺田浩さんは、今後の具体案を披露してくれた。

「品質ともに全国に誇れる泉茶ですが、売り出し方として、たとえば「秘境五家荘」とか、知名度を利用しての統一ブランドづくりを考えているんですよ。」

ブランド名の見直しも、PR効果を考えたことであろうが、観光振興とタイアップした取り組みも興味深い。「新緑の五家荘に新茶の香りを求めて」と銘打っての「茶つみツアー」が、それである。今年からスタートの、観光茶園。その成功も併せて祈りたい。

道が通った。笑顔が通った。村を結んだ秘境ルート。

隣り同士ではあるが、山越えないと行けなかった宮崎県椎葉村との峰越連絡林道として、この五月、椎葉—五家荘線が開通。九州山地の中央に位置する秘境ルートとして、早くも人気が集まっている。山の暮らしに灯をとますこの道。秘境探訪の楽しみが、また一段とアップした。



椎葉村からのメッセージ
宮崎県椎葉村企画財政課
河口 吉弘

泉村特に県境を挟んで隣接している五家荘はこれまで近くて遠い国であった。この両村が待望の峰越林道の開通によって名実共に隣りあう村となることができた。平家落人伝説を有する両村が交流を通じてよきパートナーとして共生していくことに期待したい。

両村とも過疎の村であり、若者が定着できる村づくりが大きな課題である。豊かな大自然と民俗文化をテコに、地域の活性化を図っていかねばならない。そのためには「心の過疎」を払拭していくことであると思う。

